

青薔薇と彼女の切っても切れない関係

KIRAMERO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本格派ガールズバンドであるRoseliaは頂点に立つため全てを賭けバンド活動に励んでいた。

ただ彼女たちの日常には切っても切れない関係にある1人の少女がいた。この物語はその1人の少女がRoseliaの各メンバーに振り回されながらも彼女たちをサポートしていくそんな物語である

目次

プロフィール	1	知らないところで5人は混じり合う	24
青薔薇との出会い		夏休み、知り合った人達がバンドを始めました	28
私は孤高の歌姫に魅了される	5	初めての採用面接と彼女達のライブ	32
風紀委員のお姉さんは意外な趣味を持っているようで	8	友人とのNFO、そして知る彼女の功績	36
内気な少女と小さな魔王との出会いはゲームの中で	12	夏休みの終わり私達はゲーム内で再び出会う	39
ゲーマーオフ会はゲームの話とリアルの話が混じり合う	16	青薔薇との出会いそして彼女の歩む道	44
今時ギャルはお節介が大好きなようです	20	始まる日常とオシヤレ	50

オシヤレ講座は色々大変です

54

天才(天災)少女はクラスメイトでも理

解不能なようです

57

体育祭の準備

61

プロフィール

主人公

・空島 紗菜（そらしま せな）

花咲川女子学園高校1年A組

性格は普段は大人しいが夢中になれるものが見つかりと我を忘れるかのように熱中する。

「NEO FANTASY ONLINE」は友達のをやらせてもらってから始めたがその実力は既にプレイヤーの中でも上位クラス。（燐子程ではないがあこよりは強い）音楽に関しては友希那の歌声に虜にされるまであまり関心が無かったが聞いてからは多少興味を持つようになり出来る限り友希那のライブには行っている

悩みは下の名前が紗菜と書いて「せな」と呼ぶため「さな」と間違えられること

Rosealiaのメンバーへ抱いてる今の印象（話を追うごとに加えていく）

湊友希那

・音楽にハマるきっかけを作ってくれた張本人。いまでは崇めるくらい彼女の歌が好き

今井リサ

・湊友希那の幼馴染で彼女を大切に思っている見た目とは逆の性格を持っている。なかなかお世話が好きなんじゃないかと思いきや某風紀委員と仲良くしそうでなと思える人物

氷川紗夜

・自分が通ってる学校の風紀委員でいちいち規律に厳しくあまり好きではないけど言っていることは正論なので好印象ではある。そして意外なものが好きだということ
は彼女からは秘密と言われており可愛い一面もあるんだなど普段の姿からはそうは思えないためギャップを感じている。

白金燐子

・「NFO」の数少ないフレンドの1人で実際に会ってからその後には学校で出会ったことについてすごい驚いた。彼女のプレイヤースキルは目を見張るものがあるので今度教えて欲しいって思っている。

宇田川あこ

・現時点ではまだあこ姫としか認識していないので今後彼女は大丈夫なんだろうか
彼女の未来を不安視している

Rose liaメンバーの設定（まだ結成前）

・湊友希那

原作通りではあるがリサ以外の人に自分が猫を好きであることを知られてどうやってその子をどうやってかいじゅ……口外しないようにするのか試行錯誤中

・今井リサ

原作通り。幼馴染である友希那のライブにはたまに行っていてそこで見かけた1人の少女のことが気になっている。その後仲良くなりたまにバイト先であるコンビニの常連客にもなつてくれたため5人の中では1番仲がいい

・氷川紗夜

原作通り。紗菜とは毎朝校門で会っているが先輩であるためまだ名前は知らない。そして彼女には自分がポテトが好きということを知られ友希那同様にかいじゅ……口外しないようにどうしようか考えているのだがそれを考えているといつも妹の言葉に邪魔されてしまいまだ思いついていない。

・白金燐子

原作通り。まさかぷれちゃん自分が通っている高校の生徒だとは思っていなかった。今度「NFO」でイベントがあつたらまた一緒にプレイしたいと思っている。

・宇田川あこ

原作通り。自分と同じ年だと思っている。まだ燐子と紗菜が同じ学校に通っている

ことや歳上だということは知らない。燐子と同じようにまた一緒に「NFO」をプレイしたいと思っている。

青薔薇との出会い

私は孤高の歌姫に魅了される

私はこの街にある高校のうちの1つである花咲川女子学園に通っている今年度入学したばかりの高校1年生だ。高校に入ってから2ヶ月経ち私はある程度学校生活にも慣れてきてバイトをしようかしまいか迷っていたある日、私は商店街でお買い物をした後公園に差し掛かったところである声が聞こえた。

「にゃーんちゃん、ふふっ」

なんだあれは…：銀色のロングヘアの髪型の女性が（おそらく）公園にいた猫に声をかけていたであろう場面を私は偶然にしても目の当たりにしてしまった。私はしばらくその場に立ち尽くしてしまった。その間に猫と十分触れ合ったのかその女性は立ち上がる私の方を見てきた。

「!? 貴女いつからここに？」

「えっ、えーつとにゃーんちゃんって言ってたのは覚えてます？」

「わ、忘れてちようだい…」

「え？ いや忘れてと言われても……」

「とにかく忘れてくれないかしら？」

「は、はい…」

「なら、いいわ」

スタスタスタスタ

銀色でロングヘアの女性はそれだけを言い残しこの公園から立ち去って行った。私も面白い物の帰りの途中であったことを思い出し私は急いで家に帰ったが時すでに遅しお母さんから小言をたくさん言われてしまった。

翌日私は昨日のあの女性のこと忘れられずにあの公園に行って探してみたが見かけることは無かった。そして帰り道まだ明るい時間ではあったが賑やかな場所があり近づいてみると

「今日も「孤高の歌姫」が出るんだよな。俺すごい楽しみにしてたんだよ」

「そうだな！俺も今日聴けるのをすごい楽しみにしてたんだ」

どうやらこの「CIRCLE」というライブハウスでは「孤高の歌姫」という2つ名を持つ有名な人がいるようだ。私は音楽に関してはまだあまり知らないしこの街にライブハウスがあることさえ分からなかった。

私はまだ時間があることから私は当日券を購入した。そこにいたライブスタッフの女性に「お、珍しいねー。音楽好きなの？」って声かけられたりしながらも私は会場で

あるスタジオに入っていた。しばらくしてライブが始まると色々なアーティストが歌を歌い様々な方法で会場を盛り上げていた。そして遂に「孤高の歌姫」と呼ばれる湊友希那と呼ばれる人のライブが始まった。

時は流れライブは終演した。だが私はその場から動けずにいた。彼女のあの圧倒的な迫力の前に私は虜になっていた。彼女の歌声はその場にいた全ての人を彼女の音色として包んでいた。そして私はライブハウス「CIRCLE」を出て帰路に着いた。その道中には黒髪ロングの内気な性格をしていそうな女の子と紫髪で縦ロールツインテールの女の子が私に虜になっていた。「孤高の歌姫」湊友希那さんのことについて話していた。私もその話に加わりたかったが時間も遅かったため家へ急いだ。

私は家に帰ると彼女湊友希那について調べ始めた。彼女が有名になったのはその歌声だ。その歌声はプロ顔負けレベルの歌声のようだ。確かに今日のライブを聞いたり周りの人々の声を聞くと彼女目当てにやってくるという人も大勢いるだろうと思った。そんなことをしていると夜も遅くなり私は急いで明日の用意をしてから眠りについたのだった。

そして明けた翌日は私ははこの歌姫を中心とした色々な騒動に少なからず関わりを持つていくのであった。

風紀委員のお姉さんは意外な趣味を持っているようで

あの「孤高の歌姫」湊友希那のライブを見た翌日私は今年度から入学したばかりの高校「花咲川女子学園」に向かっていた。

途中猫耳のヘアアレンジ(?)をしていた人やその人に連れ回されている金髪ツインテールの女の子が横を通り抜けていく。そうしてしばらく歩いていると私を通っている花咲川女子学園が目の前に表れた。

「はい、そこネクタイちゃんとする!」

「貴女:ちよつと短いわね」

とこんな風に学校の風紀委員の先輩が毎朝こうして校門の前に立ち生徒の服装のみだれを確認している。かくいう私も一度だけ注意されたがそれ以降は何も無いことに毎朝安堵している。彼女の名前は「氷川紗夜」という名でこの学校の風紀委員として活動している。

「あら、貴女は:うん。大丈夫そうね」

「あ、ありがとうございます」

「いえ。これからもその調子でお願いします」

「は、はい。」

「ほらそこ！ボタンをちゃんと締めなさい！」

私は風紀委員検査（？）をパスして校舎の中に入ってしまった。校舎の中に入っていくと私は自分のクラスの1年A組に入っていくと先程のあの猫耳の人がいた。最初の自己紹介の時に「キラキラとドキドキ」という言葉が印象に残っている生徒だと言うのを思い出した。私は自分の席に着くと今日の授業のための準備を始めた。高校に入ってから最初の頃は生活に慣れるという点でも苦勞はしたが2ヶ月経った今はそれほど心配は無くなっていった。

授業が終わり私は帰り支度をしてから自宅への帰路についていた。学校から私の家までには美味しそうなパン屋さんやカフェ、さらには精肉店とこの商店街にすればなんでも揃うんじゃないかと思うくらい何もかもが充実していた。そこには日本全国にある某有名ハンバーガーチェーン店もありそこはいつも帰り道に通ると仕事終わりのサラリーマンや学校終わりの高校生等で混雑していた。私はその中にある気になる人を見つけた。それは氷川紗夜さんだ。あの風紀委員検査をしている氷川先輩が何故と思いつつその後をつけて行き先輩が頼んだものを見て私は驚愕した。なんとトレーにはフライドポテトのLサイズが3つも乗っていたのだ。私はそれを見て誰かと待ち合わせかと思っていたのだが先輩が3つ食べ終わるまで誰も先輩と同じ席には座らなかつ

た。そして先輩が外に出てくると

「あら、貴女は…えつと1年生よね？こんな時間までどうしたのかしら？」

「えつと氷川先輩がいたんで話しかけようと思っただけであのお店に入っただけなのが見えて

……」ガシッ

「見ていたのですか？」ゴゴゴゴ

「ひつ、は、はいっ」

「いいですか？このことは誰にも言わないでください」ゴゴゴゴ

「は、はい。分かりました」

「それならいいです。では貴女もあまり遅くならないように気をつけてください。では」

こ、怖かった。正直一昨日のあの湊友希那さんを彷彿とさせるような気配だった。でもまさかあの風紀委員の先輩がこんなになるまで隠したいなんて…まさか私はとんでもない地雷を踏んでしまったのではないかとさえ感じた。

そして氷川先輩の言いつけ通り（決して先輩に脅されたからではない）に家に帰り、お風呂に入り食事を食べると私はある連絡があることに気が付き急いでそれを起動させた。その画面には『NEO FANTASY ONLINE』という名のゲームが表示されていた。最近はずいぶん忙しくあまりイン出来てなかったがこのゲームは私がプレイして

いる数少ないゲームのうちの1つだ。

内気な少女と小さな魔王との出会いはゲームの中で

私が「NEO FANTASY ONLINE」を始めたのは2ヶ月前のことだ。中学からの友達の人1人がプレイしていたのを見て私もやってみたいと思い私も始めてみたところ予想以上にハマってしまい一時母親から時間制限を設けられたほどだ。このゲームでは色々な役職の中から1つ選び作ったキャラクターを育てていくというゲームなのだが私は「魔法使い」を選び友達と共に他の人とやってもそれなりに戦えるレベルまでは上げてもらった。

そんなそんな「NEO FANTASY ONLINE」にはゲーム内にフレンド機能というのがありゲーム内での友達というのが存在している。その数少ない私のフレンドの内の2人から連絡があり「今日少しくエストやりませんか? (*、ω、*)」とあったのでしばらくイン出来なかつたから久しぶりにやろうということで私はこのゲームにインした。

R i n R i n 『2人ともいますか? c (・ω・、c (っ』

聖墮天あこ姫『はいはい。いるよりんりん!』

plaisir『いますよ、RinRinさん、あこ姫さん！2人ともお久しぶりで
すね』

聖墮天あこ姫『そうだねー！ぷれちゃん最近あまりインしてなくて少し寂しかった
よ』

RinRin『それでもまたこうやって3人で一緒にクエスト行けるんだからがんば
ろうね(???)』

plaisir『私もまた3人で一緒に回れるの楽しみです！それにしてもお2人と
も仲良いですね毎度のことながら』

聖墮天あこ姫『ふっふっふー我とりんりんは永久よりも深い関係なのだー』

RinRin『ぷれちゃんがない時はいつも2人でしてたからね。それに私とあこ
ちゃんはぷれちゃんが始める前からやってたしね(？ω、？)』

聖墮天あこ姫『ねーりんりん、それにぷれちゃんも今度会ってみない？』

plaisir『えっ!?会ってリアルで?』

聖墮天あこ姫『うん。そうだけどぷれちゃんはもしかしてあまりそういうのしたくな
い?』

plaisir『そういう訳では無いんだけどまず私達お互いに何処に住んでるか分
からないよね?』

R i n R i n 『私とあこちゃんは東京の〇〇っていう所なんだけどわかるかな? (・
 ; ; 』

p l a i s i r 『え、嘘!? 私もその近くに住んでるよ』

聖墮天あこ姫 『おやおや、もうこれは会うしか無さそうですね、ね! りんりん!』

R i n R i n 『そうだね! ぷれちゃんは何時頃が大丈夫かな? (・ω・・ ;) ノ』

p l a i s i r 『そうですね:今週の土曜か日曜なら大丈夫ですよ』

R i n R i n 『私はどっちでも大丈夫だけど、あこちゃんはどうかな? (; ;) 』

聖墮天あこ姫 『うーんと私は日曜日がいいかな、土曜日は練習あるから』

R i n R i n 『じゃあ日曜日にしようd (☒? *) 場所はどこうする? (; ;) ω () 』

聖墮天あこ姫 『じゃあ「C i R C L E」っていうライブハウスのカフェテリアはどうかな? そこならぷれちゃんがいるところからも来れるんじゃないかな?』

p l a i s i r 『はい。大丈夫ですよ』

聖墮天あこ姫 『じゃあそうしよう! 当日楽しみだなー』

R i n R i n 『じゃあクエスト行こっか。もう結構時間経っちゃったしね (? ; ω
 ? ; ω
) ? ; 』

・) ? ; 』

p l a i s i r 『そうですね! じゃあ今日はよろしくお願いします!』

聖墮天あこ姫 『ふっふっふーいざ我に秘めたる力を解放する時なり!』

そんなこんなで私とR i n R i nさんと聖墮天あこ姫さんとリアルで会うこととなつた私は2人の力を借りながら一緒にクエストを進めていくのであった。

ゲーマーオフ会はゲームの話とリアルの話が混じり合う

あの日から6日後の日曜日私は「NEO FANTASY ONLINE」のフレンドであるRin Rinさんと聖墮天あこ姫さんに会うために約束の場所へとやってきた。ライブハウス「CIRCLE」のカフェテリアは色々なお菓子やジュースがあることから地元では隠れた人気店だそうだ、私は「孤高の歌姫」である湊友希那さんのライブを見に行くまでであることさ知らなかったのだから私にとっては驚きだ。

「うーんそれにしても早すぎたかな…」

そうなんと私は約束した時間の40分前に着いたのだ。幾らなんでも早すぎると思ったが来てしまったのでこのまま待つことにした。その間前のライブの時に話しかけてくれたライブハウスのスタッフさんとお話をしていた。

そしてもうそろそろ約束の時間になりそうな時に前に湊友希那さんのライブを見た帰りに見たあの2人組がやってきた。彼女たちもこのカフェの常連さんなのだろうか。彼女たちを見ていたら事前に交換していた某SNSに連絡が来ていた。

Rin Rin『ぶれちゃんもう来てるかな? (・ω・≡・ω・)』

私(仮)『はい。もう来てますよ』

そう返すと先程の彼女たちが私のところに近づいてきた。

「えつと…貴女がplaisirさんで合ってますか？」

「えつ、あつ、はい。確かに私がplaisirっていう名前です」

「わー、やつと会えたよー私は聖墮天あこ姫だよ！」

「えつと…その…わ、私がRinRinです」

「は、初めまして…えつとそのRinRinさんとあこ姫さんって湊友希那さんのライブってつい最近見ました？」

「えつ？う、うん。見たけどぶれちゃんも見たの？」

「は、はい。その帰り道に見かけたなーって思い出して」

「え？じゃあぶれちゃんも湊友希那のファンなの？」

「は、はい。1回だけですからファンと呼ぶのはどうか分かりませんが、虜にはなりませんでしたね」

「やつぱり友希那さんの歌ってすごいよね！」

「わ、私は…も、もうあの人混みには…」

「そ、そういえばぶれちゃんってNFO始めてどれくらい経つの？」

「えつと始めたのは3ヶ月くらい前ですけど、実際にプレイしてるのは1年と3ヶ月くらいですかね」

「え、どういふこと?」

「友達がプレイしてるのを見てやって楽しかったから始めたって感じですね。私自身のアカウントを持ってから3ヶ月くらいですけどプレイ歴は1年と3ヶ月くらいですね」

「そうなんだね…だからあんなに上手でアイテムの場所とかも知ってるんだ」

「R i n R i nさんとあこ姫さんは始めてどれくらい経つんですか?」

「私は…1年…くらい…かな」

「あこも同じくらいかな」

「そうなんです!始めてからずっと2人で?」

「りんりんとは半年前くらいからかな」

こうして私とR i n R i nさんとあこ姫さんはそれからもN F Oやお互いのことについて話していると既に数時間も経ちお昼はカフェテリアで食べてからも話していた。その後私達は解散しました予定が合えば会おうねと約束した。

『今日はありがとうございました。またN F Oやる時はやりましょうね』

『うんまたやろうねぶれちゃんやれるの私も楽しみにしてるから(*???)』

『やろうやろう!あこもまた3人でやれるの楽しみにしてるよ!』

こうして私は「N F O」で仲良い人と知り合った。だが後日学校でR i n R i nさん

と出会いお互いに驚いたのはあこ姫さんが知らない2人だけのお話だ。

今時ギャルはお節介が大好きなようです

Rin Rinさんとあこ姫さんとのオフ会の数日後私はまた湊友希那さんのライブを見ていた。するとそこには今時のギャルのような格好の少女がいて年齢は私と同じか上くらいに見える。少なくとも私と同じ学校で同じ学年ということは無いだろう。さすがに私でも同じ学年にいる生徒とはほぼ毎日顔を見ることはあるので間違いないだろう。

あのギャルを見てから数日後私は学校からの帰り道その途中にあるコンビニに立ち寄ることにした私はコンビニの中に入っていくと

「しゃーせー」

「いらっしやいませー」

気の抜けたような挨拶とちゃんとした挨拶が聞こえてきた。私はチラッとその声の方向を見てみるとなんとそこにはこの前のライブで見かけたあのギャルがいた。私は一瞬彼女を見たがすぐに必要なものを買うべく店内をうろろしていた。カゴに必要なものを入れレジに向かい会計をする。私の他にこのコンビニは誰もいないので私は必然的に今時ギャルの彼女のレジに向かった。

「いらつしやいませー……合計で〇〇〇円になります」

「はい」

「ねえ、間違いだったら申し訳ないんだけどこの間友希那のライブにいたよね？」

「えっ？あ、はい、いましたけど……」

「それじゃあさちよつとこの後時間あるかな？」

「あ、はい。少しだったら大丈夫ですよ？」

「じゃあちよつとこの店の中でもいてくれないかな？あと少しでシフト終わるから」

「分かりました……」

私は思いがけないことについて承し今井さんという方の終わりをコンビニの中から待っていた。程なくして今井さんがやってきて私達はコンビニの近くにある公園へやってきた

「ごめんねいきなり声かけちゃって」

「い、いえその私何かしたでしょうか？」

「ううん、そんなんじゃないよ。私は今井リサって言うんだけどこの前ライブやってた友希那の幼馴染なんだ」

「あ、えつと私は空島 紗菜と言います」

「それじゃ紗菜ちゃんって呼んでもいいかな？私のことはリサでもいいから」

「えっと大丈夫です」

「あのさ友希那のこともっとさ支えてあげれくれないかな？ 同世代の子のファンってそういうないからさ今後も気にかけてあげてね」

「あつ、はい。私も友希那さんの歌好きですし、意外と可愛い一面も見たことあるし…」
「あつ、もしかして猫と一緒にのるところ見たことあるの？」

「えつ？あつ、はい」

「ふーん、今度何時か暇な時あるかな？」

「えつと土日なら…」

「じゃあ今度の土曜日さ、来て欲しいところあるんだけどいいかな？」

「は、はい。えーつとどこに行けばいいですか？」

「あ、連絡先交換しよっか？」

「えつ？あつはいい。じゃあこれでいいですか？」

「うん！じゃあまた連絡するね」

「それではこれで…」

私は今井さん…リサさんは見た目の今時ギャルとはかけ離れていることに驚いた。ああいうギャルっぽい子が実は幼馴染とかをすごい大切にしているということ。とはいえ私はこの数ヶ月の間に今までの自分とは思えない交友関係が出来たつていうこ

とに驚いていた。

そしてこの数ヶ月の間に出会った少女達がその数カ月後にガールズバンドを結成するということに私とその5人はまだ誰も知らないままだった。

知らないところで5人は混じり合う

5人がとある少女と出会ってから1ヶ月、彼女たちはある場所にいた。それはこの街のライブハウスの1つの「C i R C L E」のスタジオの1つ。今ここでは新たなバンドが誕生しようとしていた。

「じゃあ、オーデイションを始めるわよ」

「…は、はい…」

「わかりました…」

「おっけー」

1130分後

各自がキーボード、ドラム、ベースの音を奏でていた。そしてボーカルである湊友希那、ギターの氷川紗夜がこのオーデイションの審査員だ。彼女たちはFWF（Future World Festival）での優勝さらに音楽界の頂点を目指す、そんなバンドを組もうとしていた。それには音楽の才能が必要であり、そのメンバーを集めるのには限らない奇跡が必要だった。その中で出会ったのがライブハウスで「孤高の歌

姫」と言われていた湊友希那、このライブハウスでも有数のギター弾きでその才能はどのバンドでも彼女のギターの音色は色褪せることなく輝いていた氷川紗夜という天才だ。彼女たちはそんな中ある3人のオーディションを受けていた。

1人目は今井リサ。彼女はボーカルである湊友希那の幼馴染でかつては彼女のセッション相手にもなっていたという。その実力も健在で彼女たちのグループでもきつと活躍してくれるであろう。

2人目は宇田川あこ。彼女はドラマーであるが自分は2番目姉が1番目という彼女たちが目指すには不必要な部分があるとはいえドラマーとしてはかなりの才能がある。

3人目は白金燐子。彼女は内気な性格からなのかあまり喋るのが得意ではないのか口ごもってしまうがそのキーボードとしての才能はかつて彼女が嗜んでいたピアノの才能がフルに発揮されていて他には無い独特な旋律を奏でている。

「それじゃあ、オーディションの結果を言いたいと思うのだけれど紗夜はさっきの結果でいいかしら？」

「ええ、それで結構です」

「「ゴクリ……」」

「3人とも合格よ」

「！やったー」

「やったよーりんりん」

「うん……そうだねあこちゃん」

「さて、私達はF W Fで優勝してさらに音楽界での頂点を目指すんだから一切妥協しないわよ？ 貴女達音楽に全てを賭ける覚悟はある？」

「もちろん！ 今度こそ絶対に！」

「もちろんです！」

「わ、私も……」

「じゃあこの5人で行くわよ！」

「二二」ええ（うん）（はい）（は、はい）！！「三三」

こうしてプロにも顔負けしないバンドが今ここに誕生した。それは新たな音楽の時代の始まりでもあった。

—————

その頃この物語の中心人物はというと……

えほっえほっ

季節外れの風邪を引いていた。この原因はというと昨日降っていた雨なのだが彼女は学校に傘を置いてきてしまい雨に打たれながら帰ってびしょ濡れになってしまいそれが原因で風邪を引いていた。

後日彼女はここ数ヶ月以内に会った少女達がまさか同じバンドを結成していたなんて夢にも思わないだろう。ただそれは風邪が明けてから例のライブハウスのお姉さんに今度友希那のライブの時のお楽しみねと言われたのだが何のことやらでそのことを知ることはライブの時まで彼女は知らない。

夏休み、知り合った人達がバンドを始めていました

私の風邪も癒え高校に入って最初の定期試験を無事に終えて夏休みに突入した。学校では定期試験を終えてやっと勉強から一時的に解放されるーと思っていた時が懐かしい。夏休みと言ったら嬉しい反面まじか……とへこたれる生徒も多いのではないのだろうか？私もへこたれる部類に入るのだがさすがに中学と高校ではさすがに内容が違った。まず自由研究というこれまで夏休みの宿題で大きな壁になっていたものが無くなった。その代わりめんどくさいものが多少増えたが自由研究に比べればへでもない。そんな中私はライブハウスのスタッフの女性に言われた通り今日もライブハウスに足を運んでいた。だが私はここでふと疑問に思った。今日の出演者の名前の中に彼女の文字が無いのだ。一体何故だろうと思ったがライブが始まりそうだったので中に入っていた。

時は経ち次は Rose lia というバンドの順番で来ていた人たちもどういうバンドなのか知らないまま出てくるのを待っていた。そして彼女達が出てくると私は驚きに包まれた。

「え？あれは友希那さんに……あれは今井さん……え？あれは風紀委員のお姉さん……それ

に Rin Rin さんにあこ姫さん!?! どうして!?!」

「初めまして、私達は Roselia と言います。貴方達 Roselia に全てを賭ける覚悟はある? それではまず私達のオリジナル曲の「BLACK SHOUT」!!」

彼女達の音色がライブハウス全体に響き渡る。それはどのバンドにも引けを取らないボーカル、そして正確無比のギターとベース、荒っぽいながらもそれが全体のバランスを整えているドラム、美しい音色を奏でるキーボードそれぞれがそれぞれにしか出せない音色や歌声が奏でられていた。彼女達のライブはそれほどまでに圧倒的なのだ。

Roselia の出番が終わり次のグループの曲が始まったが私はその歌が何も入ってこないほど Roselia というグループの音楽に酔いしれていた。やがて今日の出演グループ及び個人の演奏が終わりみなそろそろと帰宅していくのだが私はまだ見ていた場所で立ち尽くしていた。そこにライブハウスの女性スタッフが近づいてきて

「あのーそろそろ……」

「あ、はい。すみません。それでは」

「今日の Roselia の子たち凄かったでしょ? 驚いてくれたかな」

「はい。驚きました、まさかバンド組んでたなんて知らなかったです!」

「あはは、まあつい最近だし貴女も来てなかったからね知る由もないよ」

「あの Roseelia の皆さんのこれから頑張ってくださいって伝えてもらってもいいですか？」

「うん。みんなに伝えとくね！」

「ありがとうございます。それじゃあこれで」

こうして私はライブハウス「CIRCLE」を出て家へと急いだ。その日は Roseelia のライブを見たせいか興奮してあまり寝れなかったのを覚えている。そして私は決意した。Roseelia のライブを思いつきり楽しむために夏休みの宿題をいち早く終わらせることを。そして毎回行ってはお金が簡単に飛んでいってしまうため人生初のアルバイトをすることを。

—————

一方その頃 Roseelia の面々は

「みんな、今日の演奏は良かったわ」

「ええ、練習は本番のように、本番は練習のようにそれが出来ていましたね」

「そうだねーみんな良かったよー」

「そうだね！ズババァンってあこも駆け抜けられたし、ね？りんりん」

「う、うん……私も……上手く……引けた……かな」

ガチャン「Roseelia のみんなーお疲れ様！」

「『お疲れ様でした!』」

「今日はありがとうね、そしてこれからもここをよろしくね!それとRoseliaのファンというより友希那ちゃんのファンの女の子からこれからも頑張ってくださいだつてさ」

「!?もう私達の音楽にファンが」

「うん。その子友希那ちゃんの歌声ほんとに好きみたいだからこれからはバンドとして好きにさせてあげてね?」

「ええーもちろん!このバンドを好きになつてもらおうわ。そしてFWFで優勝してみせる」

「『うん(ええ)(おー)(は、はい…)』」

「さあ、その女の子私に…いえRoseliaに全てを賭ける覚悟はあるかしら」

初めての採用面接と彼女達のライブ

夏休みも早いものでもうそろそろ8月も中旬に入りかけていたある日私は始めると決意していたバイトの面接に来ていた。場所は商店街にある羽沢珈琲店という女子力高めの子達が少し一休みしない？と言つて立ち寄るような喫茶店だ。ここを選んだ理由は単に人とのコミュニケーションがあまり得意とは言えないけどそれなりには出来ると思つたからでありさすがに今井さんみたいにあんなコミュ力おぼけみたいではないためそこそこ出来るだろうと思ひここに応募した。そして今私は面接を行うため羽沢珈琲店に来ていた。

「やあやあ、待たせてごめんね。初めましてこの店主の羽沢です。今回は応募してくれてありがとうね」

「い、いえ。初めまして空島 紗菜といます」

「うん。じゃあ今回はどうして応募してくれたのかな?」

「え、えつとRoseliaっていうバンドがあつてその…応援したりしたいんですけど…その…」

「うん…わかつた。じゃあ何時から来れるかな?」

「え？えつと今日はちよつとこの後少し用事があるので明日からなら…」

「うん。わかった。じゃあ明日そうだな…15時に来れるかな？」

「え、えつとそれは…」

「うん。採用だから明日また来てくれるかな？」

「あ、ありがとうございます！」

「うん。これからよろしくね？」

「は、はい。えつと明日の15時ですね。わかりました」

私はその後羽沢珈琲店を後にすると一度家に帰ってからライブハウスに向かった。今日はRoseliaの2度目のライブがあるのでバイトの面接の時も内心はすごいそわそわしていた。いつも通りチケットを買いいつものお姉さんにもぎってもらってから中に入っていた。時は流れてRoseliaの出番となった。

「初めましての方は初めまして、またの方は改めてまた来てくれてありがとうございます。Roseliaと言います。今夜もまずは私達のオリジナル曲の「BLACK SHOUT」から行くわ。貴方達Roseliaに全てを賭ける覚悟はある？」

「「「「「ワァー—————」」」」」

Roseliaのライブが始まった。それはこの前のライブの時よりもすごかった。彼女達の音楽全てにおいてその音色が会場全体を包んでいた。まさにその時間だけは

Roseeliaというそのものがこのライブハウス全体のカラーとして咲き誇っていた。

彼女達のオリジナル曲である「BLACK SHOUT」、そして世間的にも有名な曲の1つの「魂のルフラン」をカバーして今日は終わりたいだ。Roseeliaの後にも複数のグループや単独のライブが続いていたが私の中ではRoseeliaが最高となり前回みたいに圧倒されてその場に立ち止まるなんてことは無く今日はみんなが立ち去る中私も同じように立ち去ろうとしていたところいつものお姉さんがやってきた。

「ハア…ハア…ちよつと…待って」

「うん？あれ何かありました？」

「この前Roseeliaの皆にあのこと伝えたら……」

『Roseeliaに全てを賭ける覚悟はある？』

だって。だからこれからも彼女達のことを応援してあげてね？」

「は、はい。これからもRoseeliaのことを精一杯応援させてもらいます。今日もRoseeliaのライブありがとうございました」

「いいえ。それじゃあまたね。またRoseeliaが出る時は掲示板に貼っておくからね」

「は、はい。ありがとうございます。それでは」

「うん！またね〜」

こうして私はいつものお姉さんと別れて帰っていった。家に着き某連絡アプリに連絡が入っていた。送り主は私の中学生時代の友達で私に「NFO」を進めてくれた良き友人だ。

『Roselia? だっけ? 彼女達のライブどうだった?』

『いつも通り。すごかったよ』

『そっかー良かったね(*・ω・*) 今度さまた一緒にNFOやらない?』

『もちろん! じゃあ明日にでもやらない?』

『おっけー! じゃあいつものところに集合ね』

『うん! それじゃあまたね。おやすみ〜(*?⊠?*)。♪::*。』

『(ρω*) ノーオヤスミ』

私は良き友人との会話を終わるとベッドに飛び込んだ。

今日は良い夢見れるだろうなあと思っていた私は明日「NFO」をやれることに楽しみすぎてあまり寝られなかったことを追記しておく。そしてそのまま朝になっていったことに驚きを隠し得なかった。

友人とのNFO、そして知る彼女の功績

明けて翌日私は朝からパソコンとにらめっこをしていた。久しぶりに中学生の時の友達とNFOをやるために開いたのだ。実はとうとうとここ1週間は夏休みの宿題のためあまりしていなかったためこの1週間やることが溜まっていたためならめっこしていた。そして某連絡アプリにある通知が来た。

fee 「準備出来てるー?」

plaisir 「出来てるよー。じゃあ〇〇に集合で!」

fee 「あいあいさー」

ー数分後ー

fee 「久しぶりー」

plaisir 「そうだねー春以来2人でやるってこと無かったからね」

fee 「それじゃあ行こうか? 時間もつたいないしさ」

plaisir 「よーし、今日はとことんやるぞー」

fee 「おおーー」

ー数時間後ー

plaisir 「今日はこれくらいにしとく？」

fee 「そうだね。それにしても強くなったわね」

plaisir 「そうかな？最近はやれてない時もあつたけどフレンドの人とた

まに複数人プレイとかもしてたし……」

fee 「へえーそれは強くなるわけだ。もう私じゃ超えられないわ」

plaisir 「そんなことないよ……それで1人だけ飛び抜けてすごい人いる

んだ」

fee 「へえー誰それ？」

plaisir 「えっとプレイヤーネームがRinRinっていう人だよ」

fee 「RinRin!? あんたすごい人とフレンドなのね……」

plaisir 「え？RinRinさんってそんなに有名なの？」

fee 「有名よ。あまり人が選ばない種族を選んでそれを最高値までもつ

ていつて尚且つその高いプレイヤースキルから「史上最強の助っ

人」って呼ばれたりしてるんだよ!？」

plaisir 「そ、そうなんだ。知らなかったなあ……」

fee 「はあ……今度一緒にやる時あつたらお礼でも言っておきなさ

い。あの人そうそうフレンドになつてくれることなんて無いんだ

から」

plaisir 「わかったよ。それじゃ今日はありがとうね？」

fee 「うん！また一緒にやろう？そうね時間さえ合えばそのRinRinさん

も一緒に」

plaisir 「わかったよ後で話してみる」

こうして私は久しぶりに中学生の時の友人とのプレイを楽しんだ私はさっきのことをRinRinさんに話すと快く承諾してくれて時間さえ合えばやろうということになった。

私は中学生の時の友人から聞いたRinRinさんのあの功績……やっぱり私とは比べ物にならないくらい強くてたまに一人でボスを倒しちゃうんじゃないかとあこ姫さんと話していたくらいにだ。私なんかは到底そんなことは出来ないけれどいつかはRinRinさんみたいになってみたいって思った。

夏休みの終わり私達はゲーム内で再び出会う

夏休みも終わりに近づいてきた今日この頃私はこの夏休みにやるべき事をやろうと思っていた。そんな時にNFOにあるゲーム内チャットの出来るアプリにある連絡が入った。

R i n R i n 「今日またあちやんとNFOやるんだけど一緒に

やりませんか（・ω・≡・ω・ω）」

p l a i s i r 「うん！今日はやろうやろう。こんな暑い日に

外に出るなんてやだし…」

R i n R i n 「じゃあ今からログイン出来るかな？私と

あちやんはもうログインしてるんだけど」

p l a i s i r 「わかりました。何処に向かえばいいですか？」

R i n R i n 「じゃあ○○にある○○っていうお店にいるから

来たら声かけてね？」

p l a i s i r 「わかりました」

それにしてもR i n R i nさんはゲームが好きなんだなー私がやる時は必ず〇分前

とかあまり長時間やってないっていう時が無いくらいに……それにしてもまさかRoseliaのキーボードをやってるのがRinRinさんだとは未だに信じられない。今日聞いてみようかな。

そして私はNFOにログインしRinRinさんが言っていた場所へと移動を始めた。そのお店に到着するとそこにはいつものRinRinさんとあこ姫さんがいた。

plaisir「お待たせしました」

聖墮天あこ姫「あ、やっと来たー。待ってたよぶれちゃん」

plaisir「お待たせしました。少し準備に戸惑ったので」

RinRin「今日は何処に行く?」

plaisir「それじゃあ限定クエストに行きます?」

聖墮天あこ姫「おぉーあこもまだ行っていないから行こうよ!」

RinRin「それじゃあ行こっか?」

plaisir「おぉー」

聖墮天あこ姫「ふっふっふー我が闇の力受けるがいい」

ー30分後ー

plaisir「ふーこれでクリアーですかね」

RinRin「そうだね。お疲れ様2人とも」

聖墮天あこ姫 「我が闇の力思いしったか！お疲れ様2人とも！」

R i n R i n 「また夏休み中に3人でまた集まろうね」

聖墮天あこ姫 「そうだねー。また3人で集まってクエストしたり前みたいにオフ会とかしたいよね」

p l a i s i r 「えつと…あのお2人ってバンドとかやってます？」

R i n R i n 「どうしてそれを？」

p l a i s i r 「私この前R o s e l i a っていうグループが出てるフェス(?)に行っただんですけどそこにR i n R i n さんとあこ姫さんに似た人がいたんですけど…」

聖墮天あこ姫 「それ私達であってるよね？りんりん」

R i n R i n 「うん。私達だねぶれちゃん来てくれたの？」

p l a i s i r 「は、はい。元々友希那さんのファンでそれからバンド組んだって話を聞いて…」

聖墮天あこ姫 「やっぱすごいなー友希那さん。ねえそうだ今度R o s e l i a のみんなと会ってみない？」

p l a i s i r 「え？い、いいんですか…なんか他の方達に申し訳ないという

か…」

RinRin「大丈夫だよ。みんな優しいから」

plaisir「そ、そうなんですネ…（全員つてことは風紀委員のお姉さんも

いるよね？そしてあのギャルっぽい今井さんも…ダメだ考えた

だけでも力オスな状況になりそうだ）」

聖堕天あこ姫「どうかな？夏休み空いてる日つてあるかな？」

plaisir「もう夏休みの宿題は終わつてますから合わせようと思つたら

合わせられますけど…」

聖堕天あこ姫「じゃあわかつたらまた連絡するね！」

plaisir「え？あ、はい。わかりました」

RinRin「それじゃあまたね？また一緒にしようね？」

plaisir「は、はい。お疲れ様でした」

こうしてRinRinさんとあこ姫さんとのNFOは一緒にやるのは終わり私は椅子にもたれかかった。それは疲れではなくこれからどうしようという焦りから生まれたものだ。

(Roselia全員つてことはあ、憧れの湊友希那さんに風紀委員のお姉さんの氷川紗夜さん、今時ギャルのような今井リサさんにRinRinさんとあこ姫さん…そんな中に私なんかが入つていいのだろうか少なくともあこ姫さんと友希那さん以外はリア

ルでのことを知っているが故になんか恥ずかしい…まあいいもうとにかく会うことにはなるんだからせめてちゃんとした格好で行こう)

こんな状態の中で私は Roselia の全員と会ってもちゃん出来るかなと思っ
たが悩んでも仕方ないため私はその来る日に向けて準備を始めるのであった。

青薔薇との出会いそして彼女の歩む道

Rin Rinさんとあこ姫さんからRoseliaのみんなと会わしてあげるとい
う衝撃的な日から数日後Rin Rinさんから夏休み最後の日に大丈夫？ということ
で連絡があり私はそれを了承した。場所はライブハウスの「CIRCLE」でスタジオ
のうちの1つに来て欲しいということだった。私は当日まで寝れないんじゃないかっ
て思うほどに緊張していた、

そして迎えた当日私はとてつもなく緊張していて何故か朝早く起きたり、何をしてい
ても落ち着かないそんなことがありお母さんからは不思議がられていた。

私は家を出てライブハウスへと向かうと途中で今井さんと出会った、

「あれー紗菜ちゃんじゃんだろ？これから出かけるの？」

「あ、今井さん。えっとこれからライブハウスに待ち合わせしてて…」

「え、そうなの？私も今日あそこで待ち合わせしてるからさ一緒に行く？それと私の
事はリサでいいからさ」

「え、えっと私は…」

「あはは、無理しなくていいよ。それじゃ、また今度ねほら着いたからさ」
「あ、はい。では私も」

私は今井さんと別れてからRinRinさんとあこ姫さんとの集合場所であるライブハウスに隣接されているカフェへと向かった。まだRinRinさんとあこ姫さんは来ていないみたいで私は遅刻せずに来れたみたいで少し安堵した。

私が着いてから少ししてからこのカフェには色々な人が集まってきた。さすがにこちら辺では有名なカフェの1つである、お客さんの人気は高い。しばらくするとRinRinさんとあこ姫さんがやってきた。

「お待たせー、それじゃあ行こっか？」

「あつ、はい」

「それにしてもぶれちゃんがRoseliaのファンなんて驚いたよねりんりん」

「うん…：そうだね…：あこちゃん。それで紗菜ちゃんは何時くらいから友希那さんの歌にとりいつたの？」

「えーつと」ちよつと待つて！りんりん、紗菜ちゃんつてどういうこと!？」あ、えーつと

私花咲川の1年生でそのRinRinさんとは学校で…」

「うん…：私が図書室から出てくる時にぶれちゃんが…：いたんだ…：…：それで…」

「はあ…：そういう事だったんだ。私はどう呼んだらいいかな？」

「別に紗菜でも R i n R i n さんみたいに紗菜ちゃんでも変なのじゃなければ何でもい
ゃあ」

「じゃあ紗菜ちゃんって呼ぶね！それにしてもまさか R i n R i n と既に知り合いだっ
たなんて…」

「ごめん…ね…あこちゃん。話すの…忘れてて…」

「ううん、いいよ。だってこうやって知れたわけなんだしこれからもよろしくね？」

「うん！こちらこそ私あまり友達とかいないからさ」

「えっと…着いたけど…先に…私達から入る…ね？」

「あ、はい」

——数分後——

「それじゃ…あ…入ってきてもらって…いいかな？」

「あ、はい」

「えーつとし、失礼しまーす」

「貴女何処かで会った気が…」

「あ、貴女はたまに風紀委員の検査の時に…」

「あれー紗菜ちゃんじゃん。もしかして R o s e l i a のファンっていうの紗菜ちゃん
のことだったんだー」

「え?もしかしてRoseliaのみんなともう1回あつてたの!」

「え?あ、うん湊友希那さんとは公園でn「それは忘れて頂戴」あ、はい、それで氷川紗夜さんとは学校が同じで風紀委員の検査してる時に覚えてて後はプライベートでp「何か言つたかしら?」∴、それで今井さんとはコンビニに行つた時にちよつとおはなししてまして…」

「もうー私のことはリサでいいつて言つたのに∴ねえ今度またお姉さんと一緒に出かけない?」

「え!?!あ、あのその時は是非」

「それじゃあ私達の歌聞いてもらう?」

「ええ、Roseliaのファンならこれからも来てくれるでしょ?だからこれは貴女のためだけにやつてあげるわ。だから…」

『Roseliaに全てを掛ける覚悟はある?』

「は、はい。掛けます!」

「そう、じゃあまずは準備ね。リサ、紗夜、燐子、あこそれぞれ準備しないとね」

「え!?!」

「いくら私達でもその、準備は必要よ。だからつてやらないという事は無いから安心しつ」

「あ、はい」

「どうやら出来たみたいね。それじゃあ行くわよ」

——数十分後——

「どうだった？」

「は、はい。私のためだけにこんなしてくださってありがとうございます。これからも皆さんの音楽楽しみにしています」

「そう。これからもよろしくね。Roselia公認のフアンのえーつと「あ、私空島紗菜って言います」紗菜これからもこのRoseliaをよろしくね」

「は、はい」

「これからみんなでファミレス行きませんか？紗菜ちゃんも含めて」

「ちよつと宇田川さん。私達はこれから練習でしょう？」

「うー…「え、えつとあの気にせずに練習してください。私は帰りますから」

「ごめんねー、それじゃあまたね」

「は、はい。これからも頑張ってください」

「ええ、ありがとう」

「それじゃあRoseliaの皆さん今日は貴重な時間をありがとうございますございました」

そう言うとは私はスタジオから出て自分の家へと帰って行った。今日のRoseli

aの歌もかつこよかったし何よりあのRin Rinさんが普段はちよつとあれだけどキーボードしてる時はほんとに『NFO』をプレイしてる時のようだった。私はこの日を絶対に忘れることは無いだろう。そして私は今日この日に今後彼女たちが解散しない限りRoseliaというグループを追っかけていくことに決めたそんな日でもあった。

始まる日常とオシヤレ

カランコロン カランコロン

「いらつしやいませー、こちらのお席へどうぞ」

「じゃあ、カフェオレとこのケーキセットと」

「ブラックとこのシフォンケーキ貰えるかな」

「わかりました」

「オーダー入ります。カフェオレとケーキセット、ブラックとシフォンケーキです」

「はい。それにしても空島さんもなかなか慣れてきたね」

「そんなことないですよ。まだつぐみさんやイヴさんには遠く及びませんよ」

「ううん、そんなことないよ。紗菜ちゃん、アルバイト初めてなのにこんなに出来るなんてすごいよー！」

「あ、ありがとうございます」

「そんなに固くなくていいのに…私のこともつぐみと呼んでいいのに…」

「そ、それはおいおいということ…」

「じゃあ、もうそろそろ上がりの時間だから上がっていいよ。お疲れ様」

「お、お疲れ様でした。ではまた」

「はい。お疲れ様でした。またよろしくね」

「またね！」

こうして私は羽沢珈琲店を後にして自宅へと帰って行った。夏休みも終わり2学期が始まった。私がつ通っている花咲川女子学園も例外なく9月から始まっている。新学期になって最初の頃はまだ夏休みという感じが抜けなくて学校生活になれなくて辛かった時もあったがもうそろそろ1ヶ月が経とうとしていた今ではすっかり1学期のようになってきた。私は夏休みの間に面接を受け採用が決まっていた羽沢珈琲店においてアルバイトとして働いていた。とりあえず夏休みは週3日で学校がある期間は週2日の時もあれば週3日の時もあるという感じで決まった。

「それにしてもまだまだ暑いな。夏休みだったら家に帰ったらすぐにだらけていたなあ」

こんな風に思いながら私は羽沢珈琲店から自宅へと帰って行った。その帰り道の途中おそらくバイトの帰り道であろう今井s……りサさんに出会った。

「あれー紗菜ちゃんじゃん。もしかしてバイト帰り？」

「そうですけど……私バイトしてることなんて言っちゃったっけ？」

「ああーそれはねモカから聞いたんだよね」最近つぐの家の珈琲店に新しいバイトが

入った」って聞いてね」

「モカ……さんでしたか？どんな方ですか？」

「あれ、知らない？ほら銀髪で少し天然な子なんだけど」

「あ、見たことはありませんね。その方いつも4人とか5人でいませんか？」

「そうそう！なんだ知ってるんじゃない」

「私がいる時はまだ来たことないんですけどね。この前帰る時に見ましたね」

「そっか、そっかじゃあこれからお姉さんと出かけない？」

「えつと……あの……その」

「ああーもう、ほら行くよ！」ガシッ

「え？あ、きやあ」

果たしてリサさんは私を連れて何処に行くのだろうか？そんなことを考える暇は腕を引つ張られ連れ回されてる私にはそんなことを考えている暇は一切無くリサさんの行くがままになっていった。

ー十数分後ー

「じゃーん、着いたよー」

「えつと……何故ここに……」

「え？紗菜ってなんか同じような服しか着てないからちよつと見てあげようって思っ

て」

「うっ…じゃあその申し訳ないんですけどよろしくお願いします……」
「うん！任せてよ！」

「こうしてリサさんのオシヤレ（？）講座が始まったのであった。」

オシャレ講座は色々大変です

私はバイトが終わり家へと帰っているときちょうど彼女も同じだったのかりサさんに
出会いその後話しているとなるがままにリサさんに腕を掴まれてとある場所へと連れ
てこられた。その場所はこの街にある大きなショッピングモールだった。ここには有
名な服屋さんやアクセサリーショップ、カフェ等色々な店舗が構えているいわゆる複合
商業施設だ。

「それで…ハアハア…どこに…行くんですか？」

「うーんとじゃああそこから行こっか…大丈夫？」

「は、はい。ここはどういう感じなんですか？」

「えっとここはねー服はもちろんなんだけどほら、こういう小物みたいなものも揃って
るんだ。それにとにかく安いからさ私もよく来るんだー」

「へ、へえー今はこういうのがいんですね…」

「それにしてもいつも服はどうしてたの？」

「えっと…いつも服を買う時は友達と来てたので…でもその友達とは高校違うんでな
なか予定が合わなくて…」

「そっか、そっか。じゃあ今度はもつと計画を立ててそれで来よっか。今ってそんなに持っていないでしょ？だから今日はお姉さんがどんなのがいいか教えてあげる」

「え？また来てくれるんですか!?あの氷川先輩に怒られたりしません？」

「紗夜に？あはは、大丈夫だよ☆紗夜には今度言つとくからさ。それに紗夜ってポテト好きだからえっ…あげれば大丈夫だからさ」

「やっぱり氷川先輩ってポテト好きなんですね…（それにしてもさつき餌付けって言おうとしてたよね?）」

「あれ？私、紗夜がポテト好きなこと言ってたっけ？」

「えっと私一学期の時偶然あの某ファーストフード店で先輩が山のように頼んでたのを見てしまって…」

「あーなるほどね。そういう感じか。それにしても紗菜ってスタイルいいよねー」

「そ、そうですか？いま「リサ」…リサさんもいいとは思いますが」

「うーん、それでもなんか紗菜を見てるとねえ」

実は紗菜出てるところは出てて、締まってるところは締まっている体型なのでよく周りの人達からは羨ましがられていたのだがそんな当の彼女はそんなことは全く思っておらずむしろいつも私より友達の方がいいと思っついて私的にはあまり実感は無かった。

「あの……一つ聞いてもいいですか？」

「え、あ、うん何かな？」

「あの、あそこにいるのって氷川先輩……ですよね？」

「え？」

紗菜が向いている方にはアイスグリーンの髪の毛に髪の毛を2つに纏めている少女がいた。確かにこれだけ見れば *Rosealia* のことしか知らない彼女は紗夜だと思ってしまうだろう。だが現実はずう。

「あ、リサちゃん!!」

「ひ、日菜!」

氷川日菜。アイドルバンド「*Paste*Palettes*」のギター担当であり私と同じ羽丘高校のクラスメイトでもあり、彼女のことを一言で言えば「天才」そんな言葉が似合う少女だ。

天才(天災)少女はクラスメイトでも理解不能なようです

「この子は氷川日菜、私と同じクラスで紗夜の双子の妹だよ」

「初めまして！そでリサチーとはどんな関係なの？」

「え？えつとどういう関係なんでしょうか私達」

「そうだなー…友達でいいんじゃないかな？こうして一緒に出かけてるわけだし」

「それで？何処で知り合ったの？」

「え、えつと…そのあの…」

「こーら日菜。紗菜も困ってるんだから…大丈夫？」

「は、はい。その私空島 紗菜って言います」

「あたしは氷川 日菜って言ってる。リサチーが入ってるバンドの Rosellia の氷川紗夜は私の双子のお姉ちゃんだよ」

「そ、そうでした…か…」

「うーん、なんかるんってしないなー」

「る、るんっ??？」

「あー、気にしなくていいよ、日菜の口癖みたいなものだから」

「は、はあ……」

「そういえば紗菜って漢字どう書くの?」

「えっと……氷川先輩の下の紗夜の紗と野菜の菜で紗菜って呼びます。ほぼというか絶対最初漢字見た時は「さな」って間違えられますけど……ってこの話今関係あります!？」

「!!それって本当?」

「は、はい」

「すごい!!私とお姉ちゃんの下の名前の両方が入ってる!」

「え!?!氷川先輩と……えっと……」

「あー私のことは日菜でも何でもいいよ!」

「じゃあ、氷川先輩妹で……」

「うーん、それじゃあるんっ♪てしないなあ……あ、そうだお姉ちゃんでもいいよ?私のお姉ちゃんの名が入ってるんだし」

「こーら、日菜。紗菜をからかわないの。ごめんね、日菜のことは下の名前で呼んであげてよ。ほらそっちの方がさ日菜も紗菜もるんっ♪てするんじゃない?」

「ナイスだよ!リサちー!!」

「え!?!」

「これから、よろしくね!せなっち」

「えっと、よろしくお願ひします日菜先輩」

「うーん、まだ固いけど今はいつか……それじゃあまた学校でね！リサちー！」

「え？あ、うん。またね日菜」

「ひ、日菜さんってなんかすごい方ですね……」

「なんかごめんね……それじゃ、行こっか」

「あ、はい」

私達はリサさんのクラスメイトである氷川日菜さんと別れるとリサさんによるオシャレ講座は続いて行われた。

2時間後、私とリサさんはショッピングモールを出て、商店街へと向かっていた。私は今日という日がすごい充実した日だったという実感とあまりアウトドア系ではない私がかんなに動けるといふ驚きがあった。あとは氷川先輩の妹さんの日菜さんのあゆるん♪っていうのは正直分からなかったけどそれはリサさんでも分からないのなら私にも分からないだろう。

「えっと、今日はそのありがとうございました」

「あはは、いいよ！紗菜の案外可愛い一面とかも見れたからね。私でよかったですらまた行こうね」

「は、はい。でも私、リサさんの連絡先は知らないの……」

「じゃあ、交換しよ？ほら、ライブある日とか決まったら教えてあげるからさ」

「え？でも、大丈夫なんですか？」

「うん。私も紗菜ともつと仲良くなりたしき、きつと友希那と紗夜もそう思ってるはずだからさ。ほらほら」

「えつと、あ、はい」

私はリサさんと某連絡アプリの交換し、私の方には『LISA☆』という連絡先が、リサさんには私の連絡先である『Sen a』という連絡先が加わった。

「うん。これでいいかな。それじゃあまた分からないこととか教えて欲しいこととかあったら何時でも連絡していいからね！」

「あ、はい。その、今日はありがとうございました！」

「あはは、私も楽しかったからさ、また行こうね！今度は日菜とかも一緒にさ」

「あ、はい。では、またRose liaのライブ楽しみにしてますね！」

「うん！楽しみにしててね」

こうして私はリサさんと別れ、家へと帰っていった。今日教えてもらったこと、そして突然出会った日菜先輩のこと色んなことが起こったけど楽しい一日だった。

体育祭の準備

リサさんのあのオシヤレ講座から数日後、花咲川学園ではある一大イベントの準備の真っ只中だった。それは「体育祭」である。近年は猛暑や残暑での生徒の体調面を考慮して春先である5月にやる学校や私達のところと同様に例年通り9月開催とする学校だ。私はどちらかというとも5月にやって欲しいって思っている1人である。理由は私が元々運動をしたくない、汗をかくのが嫌い、やるのならまだそんなに暑くない5月の方がいいといった理由だ。そんな中今は誰が何の種目に出るか、がクラスの中では話されている。私は正直全員参加の競技以外出たくはないのだがそれが氷川先輩に知られたら次の日の朝には怒りの鉄槌が下されるであろうからそんな真似はされたくないため私は悩んでいた。

それから数日後私が出る種目は綱引きに決まった。何故綱引きにしたのかは短距離走や障害物競走、リレーといった1人でやる競技より大勢でやる競技の方が力を抜いてもバレにくいという点が私の意向に合っていた。さらにはこの綱引きは各クラス3人ずつという制限があるのでこれなら氷川先輩とも被らないと私はこの種目選ばれたことにこの学校で一番喜んだ。

ところが私は運がいいのか悪いのか頭を悩ませることになった。なんと綱引きに出る選手の集まりでそこにいたのは氷川先輩とR i n R i nこと白金先輩だった。いや、ほんとになんで被るの!? 白金先輩は喋れるからいいとして氷川先輩だけはほんとに被らないで欲しかったというのが彼女の本音である。被ってしまったのはほんとに偶然だが決まってしまったものは仕方がないため私はもうその点については諦めた。

「はあ……それにしてもなんで体育祭なんてイベントがあるんだろ……」

「それに関しては……同感だな」

「ん？」

「あ、あたしはその……」

「あつ、えつと私は空島 紗菜。確か、市ヶ谷さん? だよね」

「あれ? あたしと同じクラスだっけか?」

「私はA組だけ……その……戸山さんとか山吹さんが喋ってるの聞いてたからその容姿だけは知ってたから」

「そうか……あの2人か……」

「市ヶ谷さんも体育祭嫌いなの?」

「有咲でいいよ。体育祭というかそんな体動かすのが好きじゃないな」

「私のことも紗菜でいいよ。私も同じ……でも出ないと紗夜先輩に怒られるから」

「あー……そつか結局は出ないといけないのか……」

「お互い、頑張ろう」

「おう」

私と市ヶ谷さんはその後同じような行動をしたため、それなりに仲良くなっていた。